

〔東京桑野会〕

令和6年度創立140周年記念 東京桑野会総会報告

東京桑野会副会長

渡邊隆一郎

(八十一期)

令和6年6月14日(金曜日)、目黒川沿いにあるホテル目黒雅叙園東京において総会及び記念式典が開かれた。これまで20数年にわたって総会が開かれていた目白椿山荘から目黒に移ったわけである。

東京には江戸の昔から5色不動といわれる不動様が祀られている。目黒、目白は言うに及ばず目赤、目黄、目青がありそれぞれ信仰をあつめている。

17時30分、小林伸久東京桑野会副会長(84期)の司会により総会が始まりました。桜井淳東京桑野会副会長(78期)の開会の辞の後、物故会員への黙祷。つづいて来賓の紹介です。

学校長森下陽一郎先生、安積桑野会会長笠間

義裕氏(84期)、校内幹事長渡部正一先生(95期)、安積歴史博物館館長橋本文典氏(84期)、東京藝術大学名誉教授船山隆先生(73期)、関西桑野会元会長鈴木直先生(77期)、関西桑野会事務局長名木榮一氏(82期)、東京花かつみ会会長佐久間裕子様、同じく副会長橋本良子様、同じく副会長毛塚貴子様。今日の記念講演講師の横浜市立大学名誉教授矢吹晋先生(70期)と記念総会にふさわしく華やかであった。

つづいて議事に移り議長に佐藤重夫東京桑野会副会長(79期)を選んで、会務報告、決算予算報告も滞りなく進み、浅川章会長の続投も賛成多数で可決された。

浅川会長の挨拶は極めて短く、「とにかく若い人の参加がとて少ない女性は誰も来ない。これでは160周年の展望も難しい。150周年を目指して知恵を出してもらいたい」一同納得の言葉であった。

総会も無事終わり、つづいて母校創立140周年記念式典へと移った。

司会を上石利男元幹事長(80期)が務め、記念事業実行委員長の和田正哉東京桑野会副会長(77期)が記念式典代表挨拶を行った。記念事

業にかかわった会員各位に感謝の弁を述べたのである。大矢真弘東京桑野会副会長(88期)による校歌指導で全員大きな声で斉唱した。武漢ウイルス下では声も出せなかった。久しぶりで校歌を歌えて全員晴れ晴れとなった。

記念式典のメインイベントは矢吹晋横浜市立大名誉教授(70期)による講演である。題して「数奇な入来文書の運命〜朝河史学はなぜ忘れられたか」講演冒頭で矢吹先輩は「もうすぐ戦後の歴史教育は根本から変わる」とおっしゃった。なぜか世界的な歴史学者朝河貫一博士(4期)の研究してきた成果をことごとく無視してきた戦後の日本の歴史学者を痛烈に批判したのだ。大東亜戦争は唯一アメリカにのみ敗れた。大日本帝国は連合国占領軍、実質アメリカ軍によって二度とアメリカに歯向かわないように解体去勢された。その体制に利を見出した左翼政治家、企業人、学者、マスコミを戦後利得者というが、日本の歴史も全面的に改ざんしてしまったのだ。事実に戻そうという正常化対する抵抗も大きかった。彼らにとって利権が無くなることを恐れたのだ。その冴えたるもの東大歴史研だという。朝河貫一を読んでいない。

矢吹先輩は朝河の研究した「ペルリ来航」をはじめ「古事記」「入来文書」を例に挙げ事実

を追求めた朝河貫一の著作を読めば、戦後の覆された日本の歴史は正常に戻ると熱弁を振るわれた。国史を極めるには朝河貫一を読まなければだめだ。先輩の熱い言葉に共感する出席者たち。朝河研究の第一人者の矢吹先生の話は説得力があった。私としても納得の1時間であった。盛大な拍手で講演は終了した。

引き続きこれからお楽しみのお祝い会・会食である。

司会は大矢氏に代わり来賓祝辞は安積桑野会の笠間会長。会長の挨拶。新入生は140期生であること。中高一貫校になること。寄付をお願いしたいと率直に述べられた後、安積には質実剛健、文武両道のほかに開拓者精神があるとおっしゃった。なるほどそのとおりである。

つづいて森下陽一郎校長の挨拶。中高一貫教育には正直ブレッシャーを感じているが、東京の進学校麻布・開成といわれるような安積を目指したいと。

ここで乾杯となった。音頭は出席最年長の原信夫氏64期。懇談の時間となり食事が出てきた。

今日は。全員着席でフレンチのコース料理である。

食事の途中であるが関西桑野会の鈴木元会長の挨拶。東京花かつみ会の佐久間会長の祝辞と続いた。食事となると酒など差しつ差されつ笑顔が会場に広がっていく。

校歌、紫の旗ゆく所を腹のそこから声を絞り出し謳った。

115期の安孫子哲教副幹事長が紙芝居「注文の多い料理店」宮沢賢治を熱演、拍手喝采。また校内幹事長の渡部正一氏(95期)の安積クイズも面白かった。

終りに近いところで出席若手の紹介、一番若手が127期遠藤祐太朗さんと四家武彦くん。133期森大樹くん、もつと多くの若手の参集が欲しいところだ。私も自戒をこめて老人クラブになつて若者から敬遠されぬよう頑張る。

フリーフレー安積。フリーフレー安積。21時過ぎにお開きとなった。

安積高校創立

140周年に想うこと

東京桑野会副会長

渡邊隆一郎

(八十一期)



昭和40年(1965年)4月、東京オリンピックは前年の10月に

終わった。時の総理大臣は佐藤栄作(自由民主党)。アメリカは南ベトナムで共産ゲリラベトナムと泥沼の非共産化代理戦争に突入。連日、戦場の悲惨なニュースがテレビで流されていた。日本ではベトナム戦争特需が始まろうとしていた。大学といえば昭和35年の安保闘争以来自治会内で日共系と反日共系の対立が始まっていた。そんな世相の福島県、当時テレビドラマでは田舎といえは福島を指していた。県の中央に位置する郡山の市立一中から創立81年目の安積高校に81期生として入学した。

新入生の数は一中出身が1番多かった。クラス1割強は中学の同期たち。雰囲気は中学の延長だった。後の1割強は二中出身、続いて三

中、四中、五中、小原田中、行健中の面々。そして私から見れば雰囲気の違う郊外汽車通学組、本宮、須賀川やら熱海、三春、守山やらの面々。しかしこの連中がずば抜けて優秀だった。

担任は野獸という恐ろしい名の生物の教師であつた。柳沼弥重先生のこと。俺たちと同年の娘がいると同級生から聞いた。安女の1年生だ。先生から娘には近づくなと。この一言で頭から娘の姿は消えた。

それにしてもクラスの級友たちは皆優秀だった。

中学でトロンボーンを吹いていたので、安積でもトロンボーンを吹きたいと思いブラサンバンド部へ入部した。先輩からブラバンではない吹奏楽部だとたしなめられた。アンサンブルをやるとのことだった。面白くなってきた。勉強もそこそこにトロンボーンそして趣味の映画。これで3年間を楽しく愉快に過ごした。コンクールや定期演奏会も開くことができた。

1年生の時、通学は下駄ばきだった。歩いて30分強一中の先が安積だったので歩きも苦にならなかった。2年になり下駄通学は禁止となった。なんでも汽車通学かバス通学の生徒が乗客

の足を踏んだのが禁止の理由だと聞いた。ドジな生徒いたものだと思つたが、決まった規則には従うと決めていた。親父にもらつた革靴できゅきゅと鳴らして通学した。

吹奏楽部の部室は本館1階の社会科教官室の前、顧問が日本史の片岡義和先生。楽器が古く、新しい楽器をそろえたくとも金がない、いい音を出すためには最低いい楽器が必要、自明である。そこで生徒自ら寄付をお願いしようということでも市内の先輩を訪ねた。これが問題となり職員会議が開かれた。結果不問となつたが片岡先生にはご迷惑をおかけした。

練習場は体育館の傍にある廃屋元校舎。防音なし窓は割れて冬はめっちゃ寒かった。思索の森でのロングトーンの練習。毎日が楽しかった。

昭和42年(1967年)の夏、念願の第1回定期演奏会を麓山にあつた市民会館で開催した。念願の開催だけに卒業した先輩たちも大勢駆けつけてくれた。満員の観客の前で汗だくで演奏し感動にふるえたのを覚えている。定期演奏会は今に続いている。令和6年(2024年)6月30日の定演は56回開催となり大盛況であつたと聞いた。

映画は洋画に夢中になつた。マカロニウエスタンが大量に公開されハリウッド西部劇を凌駕していった。またフランス映画やイタリア映画も魅力的だった。日劇や郡映で上映される話題作は見逃すわけもなく金もないのによく見に行つた。

昭和43年(1968年)3月に卒業して56年の年月が過ぎた。日本大学芸術学部映画学科を卒業して、映画やテレビ、ビデオの演出やプロデューサーをして60歳でリタイアした。

新入生が140期生だとか。旧本館は安積歴史博物館となり(それも時々テレビドラマの舞台に登場し卒業生としては感激にむせぶ)、また男女共学となつて黄色い声が学内にこだまし来年には中高一貫校となる。安積が変わる。日本が変わる。世界が変わる。

映画監督も渡辺謙作さん(102期)、今泉力哉さん(112期)など大活躍している。将来どんな才能が出てくるか楽しみである。映画三昧の私自身はというと後期高齢者の仲間入りである。

というわけで渡邊の慙愧録の一遍でした。カットの声、暗転、フェードアウト。